

令和2年度  
**丹波市教育方針**

地域に誇りを持ち、自分たちの未来を創る人づくり  
～一人ひとりが未来の創り手に～



黒井城（南側上空より撮影）



黒井城頂上より雲海に浮かぶ千丈寺砦

**丹波市教育委員会**

## 令和 2 年度丹波市教育方針

ただいま、議長の許可をいただきましたので、教育長として丹波市の教育を担っていく上での所信を述べさせていただきます、議員の皆様、市民の皆様のご理解とご協力を賜りたいと存じます。

### 1 はじめに

今日、社会の様々な領域で急速に変化が進み、子どもたちが社会人として生きる時代は、正解のない予測困難な時代だと言われていています。ただ一つ確実に言えるのは、子どもたちの未来は、これまでの社会の延長線を大きく超えた劇的な変化が訪れるであろうということです。そのため、今までと同じ考えや行動のままでは、活躍できない時代になります。

令和 2 年度から、小学校の新学習指導要領が全面実施となり、プログラミング教育や教科としての外国語が新たに導入されます。また、子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性をはぐくむ教育の ICT 環境の実現に向けて、文部科学省に「GIGA スクール実現推進本部」が設置され、令和 5 年度までに児童生徒向けの 1 人 1 台のコンピュータと、高速大

容量の通信ネットワークが一体的に整備されます。これは、Society5.0時代に生きる子どもたちが、PC 端末を鉛筆やノートと並ぶマストアイテムとして、ICT を日常的に活用することが求められているということです。

一方、予測困難な時代を生き抜くためには、どんな課題に遭遇しても決してあきらめることなく、多様な人と関わり、コミュニケーションを取りながらよりよい解決策を見出す力をはぐくむ必要があります。そのためには、答えのない問題を解決するために学び続けようとする「主体的に生きる力」や文化的な背景の異なる人々と仕事をしたり、学んだりしたりするために必要な「多様な人々と生きる力」「協力して生きる力」をはぐくみ、自分で考え、自分で判断し、自分で決定し、自分で行動できる「自立する力」を身につけさせる必要があります。

そこで、今年度に引き続き、「地域に誇りを持ち、自分たちの未来を創る人づくり」を基本目標に、一人ひとりが未来の創り手となるために必要な「学び続ける力」「新しい価値を創造する力」「社会で自立できる力」の三つの資質・能力を身に付けさせ、子どもたちが、「わたしにもできる わた

しだからできる」と、夢や希望を抱く教育、ICT を効果的に活用した教育を展開してまいります。

また、目標やビジョンを地域住民等と共有し、地域と一体となって子どもたちをはぐくむ「地域とともにある学校」を実現するため、コミュニティ・スクールの充実に向けて積極的に取り組んでまいります。

## **2 具体的施策**

令和2年度は、小学校の新学習指導要領が全面実施となり、プログラミング教育や教科としての外国語が始まります。また、氷上回廊水分れフィールドミュージアムのオープンに向けた準備や GIGA スクール構想の整備、山南地域の中学校統合などの教育環境の整備・充実など、新たな教育内容・教育環境を構築するととても重要な年になると考えております。

令和2年度は、このような状況を踏まえ、「ICT」「外国語」「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに、10の重点施策を中心に取組を推進してまいります。

それでは、10の重点施策について、ご説明申し上げます。

### **(1) 発達段階に応じた情報活用能力の育成**

1点目は、「発達段階に応じた情報活用能力の育成」でご

ございます。「情報活用能力」は、新学習指導要領において「学習の基盤となる資質・能力」のひとつとして位置づけられました。そこで、児童生徒の発達段階を考慮しながら、情報モラルを含む情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成するため、各教科等の特性を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ってまいります。また、1人1台のタブレット整備等のICT環境整備や、プログラミング教育をはじめとするICTを活用した学習活動の充実を図り、情報活用能力を育成してまいります。

## **(2) 外国語指導の充実**

2点目は、「外国語指導の充実」でございます。この4月から、小学校5・6年生において、教科としての「外国語」が始まります。外国語を用いたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を図るため、ICTを活用した国際交流学習の充実や、「外国語教育カリキュラム」を活用した小学校外国語教育の授業づくりに取り組みます。また、中学校3年生を対象とした「英語検定チャレンジ事業」の継続はもちろんのこと、夏季休業日を活用した英検の無料対策講座を開設するなど、生徒が目的意識を持って授業に臨み、自ら

の英語力を向上させようとする学ぶ意欲を高める外国語教育をめざし、取組を強化してまいります。

### **(3) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進**

3点目は、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」でございます。子どもたちが正解のない予測困難な時代を生き抜くために必要な資質・能力をはぐくむためには、指導者の不断の授業改善への姿勢が必要であり、子どもたちそれぞれの興味や関心をもとに、一人ひとりの個性に応じた、多様で質の高い学びを引き出すことが大切になります。

そこで、自ら学び続ける姿勢を持ちつつ、友だちの考えも取り入れながら自分の考えを深め、その知識や考え方をもとに問題を解決したり、新しい価値を創造したりする「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行い、質の高い学びを実現してまいります。

### **(4) 働き方改革の確実な推進**

4点目は、「働き方改革の確実な推進」でございます。教育とは、子どもたちの未来のために行われるものであり、そ

の教育を担う教職員が幸せでなければ、よい教育はできないと考えております。寝食を忘れた教員が疲弊して一番迷惑を被るのは子どもです。大事なことは、目の前の子どもたちのためにどんな活動を優先するのかという「優先順位の設定能力」です。授業を軸に子どもたちをはぐくみ、成長させる専門職なので、優先すべきは「授業の質」を磨くことです。

そこで、80 時間を越える超過勤務をしている学校にスクール・サポート・スタッフを期限付きで配置し、「やらなければならないこと」「やった方がいいこと」を選別するなど、先生たちが元気になる学校の働き方に変革することをめざします。

#### **(5) 学校・家庭・地域・行政等の新たな協働体制の構築**

5点目は、「学校・家庭・地域・行政等の新たな協働体制の構築」でございます。地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちをはぐくむ「地域とともにある学校」づくりに向けて、コミュニティ・スクールのさらなる充実に努めてまいります。

推進にあたっては、保護者も地域住民も「学校をよくするために、自分たちは何ができるのか」という「当事者意識」

を常に持ちながら活動できる協働体制を構築してまいります。また、地域と学校の連絡調整、情報の共有、地域住民や学校支援ボランティアのみなさんに活動を呼びかけるなど、地域と学校両者と信頼関係を築きながら活動をすすめるコーディネーターとして「地域学校協働活動推進員」を配置いたします。

### **(6) たんばふるさと学・キャリア教育の推進**

6点目は、「たんばふるさと学・キャリア教育の推進」でございます。自然豊かな緑に恵まれた環境の中で生活しながら、丹波市の魅力に気づかない児童生徒が多くいます。しかし、今後の教育において重視されなければならないのは、「ひと」「もの」「こと」や実社会に実際に触れ、かかわり合う「直接体験」です。体験活動は、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧としての役割が期待されています。

そこで、フィールドを活用し、子どもたちが直面し、感じた「おや、なぜ、どうして」という問題意識を、日頃学んだことを活かし、課題解決を図ることを通して、ふるさと意識の醸成を図ってまいります。また、起業家の生き方や精神を



学び、自分の在り方や困難に対峙する力を学ぶ「アントレプレナーシップ教育」の研究推進校を引き続き指定し、実践研究に取り組むとともに、カリキュラムの開発をすすめてまいります。

## **(7) 児童生徒一人ひとりの能力や適性に応じた学びの充実**

7点目は、「児童生徒一人ひとりの能力や適性に応じた学びの充実」でございます。すべての児童生徒が、持てる力を最大限に発揮できるように、「丹波市サポートファイル」や「中学校・高等学校連携シート」を活用し、乳幼児期から就労期までの一貫した支援体制の充実を図るとともに、特別支援教育支援員や介助員を適正に配置するなど支援体制の確立を図ります。また、多様なニーズに対応するため、教職員の専門性の向上に努めるとともに、ICTを効果的に活用した指導や支援の充実を図ります。特に授業においては、ユニバーサルデザイン化をめざし、すべての児童生徒にとってわかりやすい授業づくりの実践研究に、引き続き取り組んでまいります。

## **(8) 幼児教育・保育の充実**

8点目は、「幼児教育・保育の充実」でございます。乳幼児期は遊びや生活を通して、生きる力の基礎となる心情・意欲・態度、基本的な生活習慣など、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期です。子どもたちは、遊びを通して、興味を広げ、自己調整する力を身につけたり、いろいろなことに気づいたりしながら、学びの芽生えをはぐくんでいきます。学びの芽生えを促す援助に決まった形はありません。必要なのは、一人ひとりの子どもの状態に合わせた柔軟なサポートです。どのような方向に育てほしいかという地図を保育者がもち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。そのためには、保育者には、子どもの育ちを俯瞰的に見る「タカ目」、そして子どもに寄り添う「アリ目」の両方が必要であり、より高い専門性と教育的情熱を持った指導力のある保育教諭等を育成するため、各種研修会を充実してまいります。

### **(9) すべての子どもが安心して学べる居場所づくり**

9点目は、「すべての子どもが安心して学べる居場所づくり」でございます。すべての子どもたちが、健やかな人間関係づくりや仲間との絆づくりを通して、誰もが安心して学ぶ

ことができる学級・学校づくりを、めざしてまいります。

また、教育相談室やレインボー教室、いじめゼロ支援チーム等を一箇所に集め、センター化し、不登校やいじめ等の様々な問題について迅速かつ丁寧な対応はもちろんのこと、その子の生き方や学習を促すプログラム開発などを充実してまいります。さらには、いじめを許さない意識を醸成するため、STOPit を活用した相談窓口を引き続き整備し、いじめの傍観者にならないための取組を充実してまいります。

#### **(10) 子どもたちの学びを支える教育環境の整備・充実**

10点目は、「子どもたちの学びを支える教育環境の整備・充実」でございます。子どもたちが、安心して学び、楽しい学校生活を過ごすためには、質の高い教育を支える環境の整備が必要だと考えます。そこで、学校施設の個別計画であります長寿命化計画に基づく第5次学校施設整備計画により、安全で安心な学校施設整備などに取り組み、教育環境の充実を図ってまいります。

また、GIGA スクール構想による児童生徒向けの1人1台のコンピュータと、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するため、令和5年度までに計画的にICT環境を整備

するとともに、ICT 支援員を効果的に活用し、トラブルの解決をはじめ、積極的に学校を支援してまいります。

以上、重点施策を中心に令和 2 年度の教育方針について述べさせていただきました。

子どもたち一人ひとりが未来の創り手となるためには、「学び続ける力」「新しい価値を創造する力」「社会で自立できる力」の三つの資質・能力をはぐくむ必要があります。そのためには、我々大人が、子どもの持っている可能性を心から信じるとともに、いろんな特性を持った多様な子どもたちが共に学び合う学校でなければなりません。

しかし、我々大人は、多様な特性を持つ子どもたちをちゃんと受け入れてきたのでしょうか。子どもは、学校はこうあるべきだというような枠をつくり、その枠に入れない子を「困った子」として扱ってきた一面もあるのではないかと思います。スーツケースのような大人の枠に入れる教育では、長い棒のように尖った子どもは、端っこをポキンと折らないと入れません。まん丸の大きなボールのような子どもだと、ふたが閉まりません。そんな子どもたちは、スーツケースには入れません。だから必然的に学校に来られなくなります。

大人は自分の経験から、椅子に座ってきた自分たちが「ふつう」で、座れない子を「変わった子」だと思ってきた側面もあると思います。だから画一的な学校文化しか創れないのかもしれない。しかし私は、「ふつうの子」はどこにもいないと思っています。いろいろな子どもがいつも一緒にいるからこそ、多様な社会で生きていく力を学べるのだと考えています。スーツケースではなく、風呂敷なら尖がった子も丸い子も包むことができます。私は、すべての子どもを包むことができる教育を令和2年度はめざしたいと考えています。そして、みんなそれぞれ違いがあり、自分にはない違いを持っている友だちの存在を感じられる学校。子育ての主語が常に「子ども」になる居心地のいい学校をめざし、積極的に取り組んでまいります。

「学校」という時間と空間は、本来「失敗」を経験し、学びを繰り返す場所であったはずです。そう考えると、教室は、先生の話聞く場所ではなく、様々な協同的な作業・活動に打ち込める学習空間であるべきです。教師が信頼すべきは、子どもたちの成長です。親や教師に信頼されたなら、子どもたちは多くの場合、その信頼を裏切りたくないと思うもので

す。その信頼に応えたい、応えうる人間になりたいと、自らを成長させていくものです。

教育の使命は、失敗を容認し、やり直しの機会をサポートすることだと考えています。子どもが学びに向かうのは、わかろうとしてくれる大人がここにいると気づいたときです。一番困っている子が大人を信頼したとき、はじめて周りも変わります。障がいがあろうとなかろうと、外国から来た子どもであろうと、金持ちだろうが貧困だろうが、みんな一人の子どもです。その一人ひとりの子どもが、子ども同士で学び合う、これが学校だと思います。

2050年には、日本のGDPはインドネシアの半分になり、ナイジェリアと同じになると言われています。今ある仕事や会社が、50年どころか10年後さえあるかどうかわかりません。だから、早いうちに転ぶ経験をたくさんして、どんなに失敗してもへこたれず、タフネスで、できないと思わずチャレンジできる子どもをはぐくむ教育を展開し、「自分の人生の舵は、自分で握れる」社会人になってほしいと願っています。

そこで、令和2年度も、子どもの可能性をこころから信じ、

一人も見捨てない教育を展開するとともに、子どもたちが地域に誇りを持ち、自分たちの未来を創っていけるように精一杯取り組んでまいる覚悟でございます。

今後とも、議員各位のご指導とお力添えをいただきますよう心からお願い申し上げます、令和2年度の教育方針とさせていただきます。